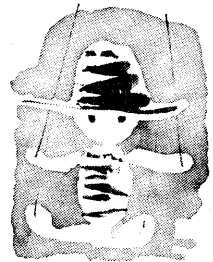


# 子どもと保育者

## —積木あそびの観察記録から—

河野としる



子どもが遊んでいるとき、別の玩具を持ち出して見せると、いままで遊んでいたものを放り出してむらがり寄ってくる。新奇なものを求めてとびついてくる。どうしてすぐその遊びを捨てて、大人の示すものにとびついてくるか？ ということは不思議なことであるけれども、興味が出てくればあきもしないで単純なつまらぬことのくり返しの試行が続くのも、幼児の行動の特徴である。

積木あそびにみられた子どもたちの遊びもまたそれであった。並べた積木の上へ上ったりおりたり、あるいはとびおりる、またよじのぼるといふことがくる日もくる日も続くのである。

乳児、年少幼児の積木あそびの観察研究から発達の過程を明らかにしようと思うのだが、(発達のためにこの積木が、子どもたちにどのように扱われたか。積木で遊んでいる子どものあ

るがままに放っておくだけで発達していくものなのか。他のどのような条件がかかわって新しい行動が生じていったか)積木あそびの観察といえば、運動的情意的行為が眼前にみられるから、研究の手順の上では比較的楽に材料がえられるともいえるが、五カ月のしん君をはじめ一歳二歳の小さい幼児の遊びは、周囲の被影響性も強いし、子どもの行為をよしとするか非とするか、介助するかしないか、教育観、指導観とも大きくからみ合い、そう単純なことでもなかった。

観察している事柄、事態をまず言語に書きかえねばならぬこと、保育のあり方をいわゆる授業型から自由型に切りかえたこと、積木の数を子どもの活動に十分なだけ準備すること、これらの問題を問題にする必要があった。

## 観察記録のまとめ

### (1) 積木と最初の出あい

— 認知中心の反応期 —

五ヵ月だったしん君には八ヵ月になったころから積木を対象とする行動が見え出した。同じ保育室の子どもたちは、しん君より大きかったので少し早くから親しみをもち、積木選択の積極的な行動が現われ出していた。

八ヵ月から一歳二ヵ月の子ども記録をまとめると表1のようになる。

積木を受容的に扱っているが、積木に触れて満足している表情をみると、対象物との関係で満足していると思われる。ただ一個の積木を相手としている。一対一の関係づけである。一個を自分に対置させて、(タッチする)、(なでる)という状態は、触感的に認知しているのだ。床にごろりと寝ていて片手で触れ、すわっていて手を積木の上におく。ひざをつきながら押し、もたれかかって押すことのはじめは押すより動いたといった方がよい。(たたく)ということも現われる。衝動的にたたくことから反応を楽しんでいるたたく方に発展する。たまたま触れているだけの積木を片づけようとする拒否したのである。

表 1. 積木と最初の出あい

認知中心の反応期 8 ヶ月～1 歳 2 ヶ月

区 分	行 動	発生順
受容する	・さわる 触れる	1
	・床にすわってたたく	2
分化する	・つかまって立つ	3
	・つかまって歩く	5
	・よじ登る	6
移動する	・膝をつき、押して移動	4

認知と認知を関連させてみせる反応行動である。

感覚的反応からはじまって、ここからだ(物理的・空間的)で空間存在としての積木をとらえたのである。

その他に、子どもがモデルとしてみるころの他者と積木がある。しん君のクラスは十九人の友だちがいたが、しん君とちえちゃんを除く十七人はいづれも一歳以上—一歳五ヵ月までの先輩である。(自分より、安定している)(進んでいる)(親しんで扱っている)などの積木あそびの状態の認知を重ねていること。その上先生が、同じ部屋にいて、つねに積木あそびを容認し、援助をしたりはげましを与えてくれる対象(積木)であるという

また積木が大きき重さによって「安定位」を保っていること、感覚的認知もあるはずである。それがわかると喜び表情で(つかまり立ち)、(よじ登る)のである。(つたい歩き)もできる。

遊びのために必要な

表 2 積木を使ってみる その1

試行する時期の1 1歳2、3カ月～1歳4、5カ月

区 分	行 動	発 生 順
積木固定 の 運 動 I-1	・腰かける	1
	・手をついて上り、立つ	4
	・(並べてある上を)はう	5
	・片足ずつ降りる	6
	・(手をそえてやって)とび降りる	7
積木移動 の 運 動 I-2	・押して歩く	2
	・押して歩いて方向転換	3
	・両手でもち身体で支えて歩く	8
	・腰かけてバックする	9

認知。これら認知と認知の結合が子どもの遊びを自発的なものへ導き、くり返しをはじめものだ。  
だが、この期の反応をみれば、知能的反応と非知能的反応の流動的段階というべきである。

(2) 積木を使ってみる その1

試行する時期 一

表2に示すように(歩行ができる)能力によって活動的になり、一段と進んだ行動が生じてくる。積木を自分で扱いうる満足があつて(腰かける)とき安心と喜びの表情を、私は共感としてもらった。イイネ! と声をかけると喜々として応じる。つづいて全筋肉の活動を覚え試みる。(起つ) (はう) (降りる)をくり返すけれども運動機能未成熟であるから行動は慎重、緩慢でやつとできるという恰好である。両手をついて積木へ上つてもはじめ立つことはなかなか困難なのだ。(積木を押し歩いて歩く)などの積木移動は歩行の完成されていない子どもにとって行動的で大好きな遊びである。積木によりかかっているとき、体重がかかったら積木が動いた。その経験的発見と身体活動の調整がはたらいて、積木移動の活動となることは、子どもにとって驚くべき体験的な発見であり、それを動機としてのくり返しの試行がはじまる。

よし子が押して歩ける、と思つてみていると快感をすべる調子にのせてどんどん進む。そして壁までいきつく。それからどうにも動きがとれない。自分で方向転換できるようになるまで熱心な試行が続くが、できるまでにそんなに時間はかからない。積木を動かす技巧とスピード感はこうして覚えられ、進度が速い。

表 3. 積木を使ってみる その2  
 試行する時期の2 1歳5、6カ月～1歳8、11カ月

区 分	行 動	発生順	
積木固定 の 運 動  II-1	・並べたくぼみへはいり込む	1	
	・ガタガタゆり動かす(すわって)	1	
	・とび降りる	2	
	・(3段並べてある上を)はう	5	
	・( " " )歩く(つかまって)	5	
	・並べて両手バランスを取りながら歩く	7	
	・またいですわる	8	
	・ほそい厚い面へ立つ(つかまって)	9	
	・間隔あるところをわたる	10	
	・またいで歩く(凹面を並べて)	12	
	積木移動 の 運 動  II-2	・並べる(3個)	3
		・かかえて運ぶ(腹と胸を使う)	4
・2個並べてあるのを押す		11	
・積む(2個)		6	

(腹部で支えて持つ)この積木は両手をかけて持ちやすいが、一歳の子どもにとつては大き過ぎる。腹と胸で支える姿勢をとると持つて動かせるのだ。移動にはある目的があつて、「あそびまで持つていく」「○○ちゃんのところまで」ということと、身体活動の調整をためす快感があつて意欲的な目的活動となる。

この段階までは、一個の積木に反応する行動であつて、どの子どもにも共通した動きである。個人的な行動の差や応用した他の反応行動はほとんど見られない。

年長の子どもの積木あそびの中へ入つてやっている場合、他の複雑な構成の一隅で順位4、5、6、7、上つたり降りたりして一個の積木中心に挑戦しているが、この一個の積木に対する認知のほかに見逃してならぬことは、上位の子どもの積木あそびをモデルとしてとらえていることである。この、他の子どもの遊びタイプの認知は、行動発達にとつて大きな役割をもつと考へる。

(3) 積木を使ってみる その2

— 試行する時期 二 —

歩行が完成されると共に、積木に対する反応行動は徐々に目的活動と共に進められる。(とび降りる)——三六センチの高さから床面へとび降りることは、距離感と着地感が心のなかで充分たしかめられて、その上運動機能上の見込みがあつてやっているのである。この統合された行動が生まれるまでの反覆練習と習熟のプロセスは、ひとりひとりの子どもの自己目的的活動によつて支えられたもので、もう無目的衝動的行動ではない。

発生順3に(並べる、三個) 発生順6に(積む、二個)がある。並べることが先にできてのち積むようになる。これは一般の積木あそびでも見られる。二次元の操作のあと三次元の空間操作ができる。

(並べる)ときどこかへ焦点をもとめて、定位方向づけをする。やっているうちに気付く。はじめ両手でもったままで床に置いて並べる。横向き、反対向きを考えて並べるのは焦点をどこかに求めようとしている手さぐりの状態である。

△△ちゃんがあっち向きこっち向きの並べ方をしている。そこへやってきた○○君、さつさと置き方を換えている。きれいにそろったのを見た△△ちゃんは、この並べ方に気付いて二人の交渉はうまく成立した。

乱れた置き方をしなくなってくるのは、一貫したある判断をしていると思われる。個数は二―三個を扱うことができる。

#### (4) 積極的に使って遊ぶ

##### — 使用操作の時期 —

身体活動が活発で、状況とか目的とかに協応する自信を含んだ行動が見られる。目的行動に直進し積木あそびに意欲をまし、遊び時間も持続し興味はうんと深まる。

他の子どもが並べた上を歩いたり、自分の運んだ積木を他へ重ねたり、互いが互いの領域へ入り込んで、構成が複雑になっていくことを諒解し、望んでいるようである。積木構成を連帯活動として黙認しながら積んだり動かしたり、人が積んだ上から跳ぶとか、積木を操作していて、仲間として追認している。こうした場合衝突は少なく、他を補うような配慮が働いて、まるで協同的かと思える。この場合他者意識より対物意識が強く、他者のしごとの上へ積み重ねるために、それが協同作業とみえるだけである。しかしお互いの関係作業を見つめながら、積木あそびの発展があるのは事実である。

使用個数は二―五、六個となつてこの時期までに積木使用の原型が出揃う。

(すき間をくぐる(けんすいをする)(人をのせ押す)などは、積木構成の作業中の小休止の間に、構成のある型からイメージが発展していくあそびのようである。

大きな構築物のなかで、安心してはまり込んだり(お風呂だよ、という)じつと落ちついて腰かけていて、小休止がすむとまた次のエネルギー活動として展開する。

表 4. 積極的に使って遊ぶ  
使用、操作の時期1歳10ヵ月～2歳3.4ヵ月

区 分	行 動	発生順
積木固定 の 運 動 III—1	並べてその上を歩く、はう、両足とび	2
	・すき間をつくる くぐる	4
	・ほそい厚み面へ立つ、歩く	5
	・3段重ねた上からとぶ	7
	・間隔のあるところをとぶ	9
	・並べた上で片手片足をあげる(つかまって)	10
	・けんすいをする	12
積木移動 の 動 動 III—2	・数個並べて走りながら押す	1
	・3段に積み重ねる	3
	・2個積み重ね押す、持ち運ぶ	6
	・頭の上に持ち上げる	8
	・すわって手で両端もち <small>カタカタさせながら前進</small>	11
	・人をのせ押す	13
	・いろいろな並べ方をする	14

(5) 自由な構成ができる

—自由な活動の時期—

説明ぬきでよいと思うが、自由に思いのままにいろいろな構成をたのしみ、ダイナミックな遊びとして発展させることができる。試行をくり返ししながら二歳三ヵ月から二歳四ヵ月になる

とこの段階にいたる。

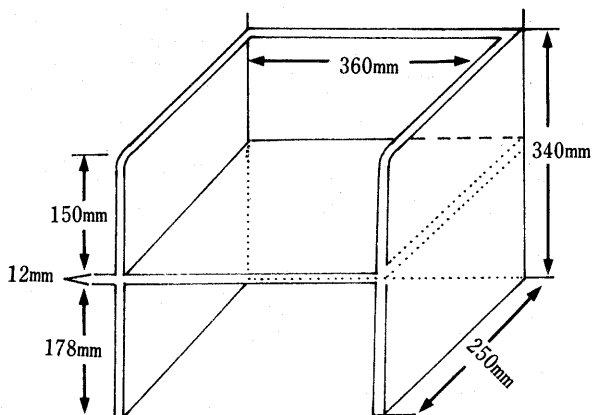
構成された積木を見ると、まるで四歳児か五歳児が遊んだかと思われるくらい雄大で意欲的な作品である。(記録は割愛)

#### 積木あそびの発達

知覚—運動—操作の順で、積木あそびの発達をとらえることができた。積木を使いこなし、遊びに至るまでに二つの質的な段階に注目できる。認知中心の時期から試行する時期へ。わずか二ヵ月間で次の段階へうつる。二つは試行する時期から使用操作の時期へ。はじめの飛躍は、歩行が可能になったことによる行動範囲の広がり、運動の可能性による。次は二歳児の大きな筋肉運動が協応的になり、こまやかな運動も発達して、物を扱う技量が発達したことによると考える。運動を重ねてはつきりした知能的反応に変わってきたとみることができる。

#### まとめ

五ヵ月から一歳、二歳、三歳のみどり保育所の乳幼児全員を対象として観察した。また積木は椅子型を改良した大型積木を用いたが、一歳前後の乳幼児にも移動可能であり、構成遊具としての要素をもっている。



この観察の結果から、発達の段階は四つにわけられたが、その発達のしくみについてはなお検討する余地がある。

それ以上にこの観察で考えたことは、保育者が子どもにいかにして接近し得るかということである。

幼き者たちは自分の内からの欲求に支えられて自分で遊びを見つけ、積木を動かす作業をする。非知的的活動からやがてあるイメージを生んで作業が創造されていく。保育者はその瞬間子どもらにとって必要な助力（黙認のうなずき、肯定のめくばせ、賞讃のことばなど）ができなくてはいけない。しかしそのためには子どもらを、つき離していかも子どもらが見えなくなってしまう。子どもたちが見えないほどべったり子どもにくっついていては、ほんとうに必要な賞讃と助力をみつけることができない。それでは子どもたちに有効に接近することはむずかしい。

（島根女子短大）